月　日　名前　　／50点

【答え】

【中1】国語 文章テスト　説明文 1/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

教室にはってある地図も、駅前の案内図も、たいていは上が北になっている。私たちはそれを当たり前だと思っている。しかし、少し考えてみてほしい。地球は丸い。宇宙から見れば、上も下もない。地図の上を北にしなければならない理由は、自然の側にはどこにもないのだ。

実際、昔の地図には、上が東のものや、上が南のものがあった。太陽がのぼる方角を上にした地図もあれば、自分たちの国の中心を上にした地図もあった。どれも間違いではない。地図をかく人が、何を大切にするかによって、上の向きは決まっていたのである。

では、なぜ今は北が上なのか。理由の一つは、船の道具にある。方角を知るための磁石は、いつも北を指す。海の上で自分の位置を確かめるとき、磁石が指す向きと地図の向きがそろっていれば、頭の中で回さずにすむ。こうして、船で使う地図は北を上にするようになり、それが広まって、今の形になったと言われている。

つまり、「上が北」は、自然の法則ではなく、人が決めた約束事なのだ。約束事だから、別の約束をしてもかまわない。たとえば、駅の案内図には、上を「自分が向いている方向」にしたものがある。北ではなく、自分の向きを上にしたほうが、初めての場所では分かりやすいからだ。

私たちの身のまわりには、こうした約束事がたくさんある。道路の左側を走ること、時計の針が右回りであること、文字を左から右へ書くこと。どれも、そうでなければならない理由が自然にあるわけではない。けれども、みんなが同じ約束を守るから、話が通じ、物が動く。「当たり前」の多くは、誰かが決め、みんなが受け入れた約束なのである。その約束の中身を知ると、当たり前の景色が、少しちがって見えてくる。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　「地図の上を北にしなければならない理由は、自然の側にはどこにもない」とありますが、筆者は「上が北」を何だと述べていますか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

人	が	決	め	た	約	束	事		

問二（十点）　第二段落で、筆者が昔の地図の話を出した理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　昔の地図は正確でなかったことを示すため。
イ　上の向きは地図をかく人が決めていたことを示し、北が上なのは自然の決まりではないと分かってもらうため。
ウ　東や南が上の地図のほうが、今の地図よりも便利だと主張するため。
エ　地図の歴史が長いことを読者に伝えるため。

イ

問三（十点）　船で使う地図が北を上にするようになった理由を、筆者は磁石の性質から説明しています。その性質を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

い	つ	も	北	を	指	す			

問四（十点）　駅の案内図に、上を「自分が向いている方向」にしたものがあるのはなぜですか。「～から。」に続くように、三十五字以内で説明しなさい。

初	め	て	の	場	所	で	は	、	北	よ	り	自	分	の	向	き	を	上	に
し	た	ほ	う	が	分	か	り	や	す	い									

問五（十点）　最後の段落で筆者が述べていることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　約束事はだれかが勝手に決めたものなので、守る必要はない。
イ　身のまわりの「当たり前」の多くは人が決めた約束であり、その中身を知ると当たり前が違って見える。
ウ　道路や時計の決まりは自然の法則なので、地図とは別に考えるべきだ。
エ　約束事が多すぎるので、減らしていくべきだ。

イ

月　日　名前

／50点

合計　／100点【答え】

【中1】国語 文章テスト　物語文 2/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夏の大会で、ぼくはベンチにいた。背番号は十八。一年生でただ一人、ベンチ入りできたのはうれしかったが、出番がないことは、最初から分かっていた。ぼくの仕事は、スコアブックをつけることだった。

スコアブックは、試合の全部を記号で書く帳面だ。誰が打って、どこに飛んで、何が起きたか。一球ごとに、小さなますに書きこんでいく。三年生の先輩は「頼んだぞ」とだけ言って、グラウンドへ出ていった。

三回の裏、先輩がヒットを打った。ベンチが沸いた。ぼくは立ち上がりかけて、座り直した。書かなければならない。ますに、記号を書いた。ペンを持つ手が、少し震えていた。

試合は負けた。三年生は、その日で引退だった。片づけのあと、キャプテンの先輩がぼくのところへ来て、スコアブックを開いた。

「これ、おれのヒットか。」

「はい。」

先輩はしばらく、そのますを見ていた。それから、「お前が書いてなかったら、このヒットは残らなかったな」と言った。ぼくは何と答えていいか分からず、「はい」とだけ言った。

家に帰って、ぼくはスコアブックをもう一度開いた。汗でにじんだ記号が、ページのはしからはしまで並んでいる。試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいないような気がしていた。でも、違った。ますの一つ一つに、ぼくがいた。

ぼくは、来年の夏を思った。来年は、グラウンドに立ちたい。そのときは、誰かがこの帳面を持って、ベンチにいる。ぼくのヒットを、その誰かが書く。

スコアブックを閉じて、ぼくは机の引き出しの、いちばん上にしまった。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　「ぼくは立ち上がりかけて、座り直した」とありますが、座り直した理由を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

書かなければならない

問二（十点）　「ペンを持つ手が、少し震えていた」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　記号の書き方を忘れて、あせっていたから。

イ　先輩のヒットに気持ちが高ぶり、その興奮がまだ残っていたから。

ウ　試合に出られないことがくやしくて、泣きそうだったから。

エ　ベンチが寒くて、手がかじかんでいたから。

イ

問三（十点）　先輩の言葉を聞く前、「ぼく」は自分をどのように感じていましたか。「～ような気がしていた」につながるように、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいない

問四（十点）　「ますの一つ一つに、ぼくがいた」とありますが、これはどういうことですか。先輩の言葉をふまえて、五十字以内で説明しなさい。

試合には出なかったが、一球ごとに記録を書くことで、自分もこの試合の一部として関わっていたということ。

問五（十点）　「机の引き出しの、いちばん上にしまった」という最後の一文から読み取れる「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　スコアブックをもう見たくないので、目につかない所にしまった。

イ　スコアブックを大切なものとして扱い、来年への気持ちと一緒にしまった。

ウ　引き出しがいっぱいで、上にしか入らなかった。

エ　先輩に返すのを忘れないように、目立つ所に置いた。

イ

【中1】国語 文章テスト（100点）　説明文 1/2　答えと解説（1問の配点は問題の半分）

問一（十点）　答え：人が決めた約束事

解説：第四段落の「『上が北』は、自然の法則ではなく、人が決めた約束事なのだ」が根拠。「自然の法則」と対にして述べている。

問二（十点）　答え：イ

解説：第二段落の最後「地図をかく人が、何を大切にするかによって、上の向きは決まっていた」が根拠。「どれも間違いではない」と述べているので、アは合わない。

問三（十点）　答え：いつも北を指す

解説：第三段落の「方角を知るための磁石は、いつも北を指す」が根拠。磁石の向きと地図の向きをそろえると、頭の中で回さずにすむ。

問四（十点）　答えの例：初めての場所では、北より自分の向きを上にしたほうが分かりやすい

解説：第四段落の「北ではなく、自分の向きを上にしたほうが、初めての場所では分かりやすいからだ」が根拠。約束事だから別の約束をしてもよい、という流れの中の例。

採点のポイント（二つそろって満点、一つなら半分）

①自分の向きを上にしたほうが分かりやすい

②初めての場所では（という条件）

問五（十点）　答え：イ

解説：「『当たり前』の多くは、誰かが決め、みんなが受け入れた約束なのである」「当たり前の景色が、少しちがって見えてくる」が根拠。アは「みんなが同じ約束を守るから、話が通じ、物が動く」と逆。

【中1】国語 文章テスト（100点）　物語文 2/2　答えと解説（1問の配点は問題の半分）

問一（十点）　答え：書かなければならない

解説：直後の「書かなければならない」が根拠。喜びたい気持ちより、自分の仕事を優先している。

問二（十点）　答え：イ

解説：直前の「ベンチが沸いた。ぼくは立ち上がりかけて」から、ぼくも先輩のヒットに沸いていたことが分かる。夏の大会なのでエは合わない。

問三（十点）　答え：試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいない

解説：第七段落の「試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいないような気がしていた」が根拠。

問四（十点）　答えの例：試合には出なかったが、一球ごとに記録を書くことで、自分もこの試合の一部として関わっていたということ。

解説：先輩の「お前が書いてなかったら、このヒットは残らなかったな」が根拠。記録があるから試合が残る、その記録を書いたのは自分だという気づき。

採点のポイント（二つそろって満点、一つなら半分）

①試合には出ていない（が）

②記録を書くことで試合に関わっていた・試合の一部だった

問五（十点）　答え：イ

解説：直前の段落で「来年の夏」を思い、自分のヒットを誰かが書く未来を想像している。「いちばん上」は、すぐ手に取れる大切な場所。アなら奥にしまう。